

## 愛知大学東亜同文書院大学記念センター資料の富山展示会・講演会

テーマ 「東亜同文書院大学から愛知大学へ—最後の校舎呉羽分校—」

日時 展示会:2011年9月17日(土)~18日(日)10:00~18:00

講演会:2011年9月17日(土)13:30~16:30

場所 富山国際会議場2階会議室

愛知大学東亜同文書院大学記念センターは、1901年に上海に設立された東亜同文書院大学の研究と収蔵資料の公開を「東亜同文書院大学から愛知大学へ」をメインテーマとし、横浜からスタートし、東京、福岡、弘前、神戸、シカゴ、京都、米沢、名古屋で展示会と講演会を行ってきた。

2011年は東亜同文書院大学最後の入学生で、戦争の激化により東シナ海を渡れなかった第46期生が過した旧呉羽紡(現・富山市民芸術創造センター所在地)のある富山市で開催した。富山空襲直後の救援活動も含め、呉羽分校での学生生活や東亜同文書院について広く知ってもらうためである。

**司会** それでは定刻となりましたので、ただいまより愛知大学東亜同文書院大学記念センターの講演会を開始いたします。私は本日の司会を担当いたします愛知大学の武井義和でございます。よろしく願いいたします。まず初めに佐藤元彦愛知大学学長より皆様にご挨拶がございます。佐藤先生よろしく願いいたします。

**佐藤** 皆さんこんにちは。愛知大学の佐藤でございます。本日は愛知大学東亜同文書院大学記念センター主催の展示会、そして今日これから夕方までの講演会を開催するにあたり多くの方にお集まりいただき、誠にありがとうございます。大学を代表してまずはお礼を申し上げます。

さてこの講演会・展示会でございますが、後ほど同僚でもありますセンター長の馬場教授からも言及があるかもしれませんが、過去5年間東京、横浜、神戸、福岡、あるいは先ほどのDVDにございましたけれども山田兄弟の故郷である弘前、そういったところで開催をしまりまして、今年は呉羽分校がございました富山で開催をさせていただくということで、本日の企画に到った次第でございます。後ほど東亜同文書院、あるいは呉羽分校等々につきましては、馬場教

授あるいは卒業された書院生の方にご講演をいただきますので、その中でいろんなことをお聞きいただきたいと思いますのですが、せっかくの機会でございますので、先ほど同じくDVDの中にありました愛知大学が東亜同文書院大学の精神をどのような形で受け継いでいるのか、それにつきまして最近の状況を中心に私からご紹介させていただいて、開会の挨拶に代えさせていただきたいと思います。

愛知大学の中で、東亜同文書院大学の伝統が研究においても教育においてもしっかりと受けとめられてきたというのが私の率直な印象でございます。具体的には研究という面で行きますと、愛知大学の最初の研究所は国際問題研究所でございますが、こちらのほうが設立されました1948年の当時は、まだ中国研究という形で名前を名乗ることがなかなか難しい時期でございましたので、国際問題研究所という名前で、実質的には中国研究を続けてきたというのが、愛知大学の中国研究の歴史の最初のものでございます。

その後最近になりまして国際中国学研究中心(ICCS)がスタートいたしまして、こちらのほうは文部科学省の21世紀COEの対象にもなりました。その中でさらに研究の幅が広がり、文字

通り国際中国学の研究という分野で、海外のいろんな大学と提携してこの間研究が深められてきているところでございます。

さらに言えば、まさにこれが研究をベースにした人材の養成というところに関わってくるわけにありますけれども、日本でおそらく最初のケースであったと思いますが、博士課程の中国との連携によりまして、博士の二重学位が授与できるという仕組みを作り出しました。これも文科省を始めとして他大学を含め非常に国内外で評価をされてきたところでございます。博士課程は3年間でございますけれども、3年間のうち中国の学生は1年間を愛知大学で過ごし、2年間は中国の大学で過ごします。逆に日本の博士課程の学生は2年間は愛知大学で過ごし、そして1年間は中国で過ごすというプログラムでございまして、その3年間の研究成果に基づいて博士論文を2つ書きます。それが中国側の大学と日本の愛知大学とで審査を受け、合格すればそれぞれに博士の学位が授与されるということでございます。

日本人の学生はまだまだ実績が少ないので、これからまた力を入れていかなくてはいけないと思いますけれども、中国の学生はこの間毎年2～3人ずつ、多い時には4人程度その対象となる学生が出てきているということで、中国での博士課程修了者が、中国の現在の研究の担い手になっているという状況がございまして。先般私も中国で卒業生(修了生)がどういう活躍をしているかということを目の当たりにしてまいりましたけれども、大学の先生であるとか、あるいはシンクタンクの研究員という形で世界のトップクラスの研究機関、大学において活躍をされているのがよく分かりました。併せてそういう卒業生によって現在同窓会の支部といったものも結成されています。

教育にもう少し目を向けてみますと、現代中国学部という学部が1997年にスタートしております。現代中国学部は、皆さんご存じの方が多いかもしれませんけれども、日本では学部として「中

国」の名前が付いた唯一の学部でございまして。学科・専攻レベルではたくさん例があると思えますけれども、それでも1学科あるいは専攻単位で、せいぜい1学年の定員が50名～60名ではないかなというところでございまして、現代中国学部につきましては1学年180名ということで、毎年約200名の学生が入ってきております。

その学生達は、高校までは中国語を勉強したり、中国について深く学ぶということはあまりないと思いますので、最初の1年間は愛知大学において中国語を含め極めて基礎的なことを学びます。そして2年生の前半4か月間は、その基礎をベースにして実際に中国に渡り、徹底的に現場で中国語なり中国についての基礎知識を身に付けるというプログラムになっております。1学年全員ですから毎年約200人が愛知大学から中国の大学に渡っているということで、受入先につきましても周恩来元首相の出身校で知られております天津の南開大学というところに、愛知大学会館という建物を建てていただきまして、そこを4か月間、愛知大学の学生が占拠して勉強すると、そういうプログラムになっております。

そして2年生の夏休み前に日本に戻ってまいりまして、1年生からの勉学を含めてそれまでに学んだことの確認を2年生の後半で行ない、3年生4年生では身に付いた中国語を使って中国の現地で調査をするとか、あるいはインターンシップについても中国で展開するというプログラムを組んでおります。インターンシップはたとえばデパートの売場で中国人のお客さんの相手をするとか、そのような形で学生が経験を積んでいます。200人全員という具合にはなかなかいきませんけれども、しかしそういう中で着実に日中友好の架け橋になる人材が育ってきているということも事実でございまして、今の話とは全く関係なく企業の関係者といろいろ懇談をしていると、時折「愛知大学の現代中国学部の学生さんを採用しました。最初の人事異動で中国配属にいたしました」という声も、けっこう最近聞くようになっています。併せて中国語の弁論大会で全国

のトップランキングに入ってくるケースも珍しくございませんで、さらに言えばそういう形で教育を受けた若い人達が、中国の中で職を得るといったようなケースも出始めております。

東亜同文書院大学と愛知大学との関係で言えば、当時の学籍簿や成績簿を愛知大学が受け継いだということを最大の根拠にしておりますけれども、東亜同文書院大学での研究や教育の精神が今の愛知大学に着実に継承され、根付いているのではないかと私自身は考えております。せっかくの機会ですので、過去をどう振り返るかということだけではなく、現在愛知大学がその精神をどういう形で受け継いでいるのかということ、この機会にぜひ皆さんに知っていただきたいと思ひまして、今のようなお話をさせていただいた次第でございます。

改めまして本日は大勢の方にお集まりいただき、感謝を申し上げます。誠にありがとうございます。

**司会** 佐藤先生ありがとうございました。講演会に先立ちましてお願いとお知らせがございます。お手元の白い袋の中のファイルに本日の講演会の資料が入っております。もしお手元がない場合にはお近くのスタッフに声をおかけください。なお講演会資料と共に、講演会アンケートというものが入っております。今後のわれわれの活動の参考とさせていただきたいので、大変恐縮ですが忌憚なきご意見をご記入の上、お帰りの際スタッフにお渡しいただくか、受付設置のアンケート回収箱にお入れくださいますよう、よろしくお願い申し上げます。

なお明日午後2時半、本日も講演になります井上先生のご案内で、旧呉羽校舎(現在は富山市民芸術創造センター)の見学会を行ないます。北陸本線呉羽駅の近くですので、ぜひとも皆様ご参加いただければと思います。もしご参加いただける場合には、明日午後2時半、現地集合の形をとらせていただきますので、よろしくお願いいたします。

ではさっそく講演会に移ってまいります。まず最初に馬場毅先生より「上海にあった東亜同文書院について」という題でご講演いただきます。馬場先生の略歴を簡単にご紹介しますと、先生は1945年埼玉県生まれ。早稲田大学第一文学部師範科を卒業後、東京教育大学大学院文学研究科博士課程で学ばれました。ご専門は中国近代史、日中関係史でございます。主なご著書は、共著としまして「中国八路軍、新四軍史」、そして単著としまして「近代中国華北民衆と紅槍会」等がございます。現在愛知大学現代中国学部教授、そして東亜同文書院大学記念センター長、愛知大学国際問題研究所長等を務めておられます。それでは馬場先生よろしくお願ひいたします。